



ひとみ先生は、山奥の小さな学校にやってきました。ひとみ先生は、音楽の先生です。でも、生徒に教えるのは初めてでした。

「うまく教えられるかしら。心配だなあ」

ひとみ先生は音楽室に行きました。古いオルガンがありました。先生は鍵盤を一つたたきました。♪。そして、首をかしげました。

そこへ、用務員の遠山さんが入ってきました。

「先生ここでしたか」

「音楽室を見ておこうと思ひまして」

ひとみ先生は、今度は鍵盤を三つ叩きました。♪♪♪

「やっぱり、おかしい。そう思いませんか？」

遠山さんは首をかしげました。

「少し変でしょう、この「♪レ」の音」

「私には分かりませんよ。でも、ずいぶん古いからなあ、私がここに来た時からあったから、もう、40年は越えているね」

「40年！」

「でも、大丈夫、大丈夫、新しい先生には、エレクトーン...」

「エレクトーン？」

「そう、そう、そのトーンが明日届きますから、古いオルガンはもう捨てましょう」

「そうね、変な音しかでないオルガンじゃ仕方ないですね」

ひとみ先生が、また、鍵盤を人差し指で叩きました。音が出ません。

「「ッソ」なんか音が出ないわ」

「わしと同じ定年さ」

遠山さんは、掃除をして教室を出て行きました。ひとみ先生は、オルガンの椅子に腰掛けました。ひとみ先生は、オルガンに頼杖をついて、うとうとしはじめました。

不思議なことが起こりました。オルガンから、音符が現れました。♪ド、♪レ、♪ミが現れました。

「新しい先生だって」♪ドが言いました。

「きれいな人だね」♪ミが言いました。

「ほんま、めっちゃきれい」♪レが言いました。

ひとみ先生が、声に目を覚ましました。オルガンの上に♪がいました。数えると6ついました。

「俺たちが見えるみたいだよ」♪ドが言いました。

「君たちは？」

「私は♪ミ。女の子よ」

「わいは、♪レや」

「ぼくは♪ド」

他の♪も挨拶をしました。♪ファとシは女の子。♪ラは男の子でした。

「私は、汐見ひとみです。でも、ソ君がいないね」

「♪ソが家出したんだ」♪ドが言いました。

「ソうなんです」♪レが駄洒落を言いました。ひとみ先生が笑いました。

「笑った、笑った、わいのしゃれに笑わはった」♪レは大喜びです。

「しゃれ？」ひとみ先生が言いました。

「しゃれとちゃう…。ほんなら、何がおかしいんや」

「あんたの顔がおもしろい」

ひとみ先生が笑いながら言いました。

「なんや、先生も大阪か」♪レが聞きました。

「ちゃう、ちゃう」

ひとみ先生がおどけて答えました。

「おもしろい先生やなあ」 みんな笑いました。

「音符のレ君」

♪レ君の頭を軽くポンと叩きました。

「レー」。音が出ました。

「レー」。ひとみ先生が歌いました。また、♪レ君の頭をポンと叩きました。

「レー」

「そう、そう、それじゃみんなで」

ひとみ先生が次々に♪の頭をポンと叩きました。

「ドはドーナツのド レはレモンのレ ミはみんなのミ ファ  
はファイトのファ」

ひとみ先生は歌いました。でも、そこから続きません。

「♪ソ君を探しに行こう」♪ドが言いました。

「天文台に行きましょう」♪ミが言いました。

「せや、せや。あそこは村で一番高いよって」 ♪レが言いました。

「先生も一緒に行こう」 ♪ファ、ラ、シが声をそろえて言いました。

外は夜になっていました。♪たちはキラキラ光って空を飛んで行きます。ひとみ先生は一生懸命追いかけてきました。ひとみ先生は天文台に上がりました。星がひとつさびしそうに光っていました。あれが♪ソ。6つの♪が、♪ソを目指して飛んでいきます。助け合いながら、ぐんぐん上がっていきます。

「がんばれ!」

ひとみ先生は叫びました。やっと、着きました。空に北斗七星が輝いていました。

♪たちの声が聞こえてきます。ひとみ先生は七人の子供たちに囲まれていました。

「生徒は七人だけさ」

遠山さんが言いました。

ひとりひとりが♪に似ていました。初めて見る子供はきつと♪ソ。ひとみ先生はオルガンを弾きました。とてもきれいな音が出ました。

「遠山さん。私このオルガンが大好きです。エレクトーンはいりません」

ひとみ先生は言いました。そして、歌い始めました。子供たちも一緒に歌いました。さあ、皆さんも一緒に歌いましょう。

ドはドーナツのド レはレモンのレ

ミはみんなのミ ファはファイトのファ

ソは 青い空 ラはラッパのラ

シは幸せよ さあ歌いましょう